

熊谷三尻中 独自時間割の成果発表

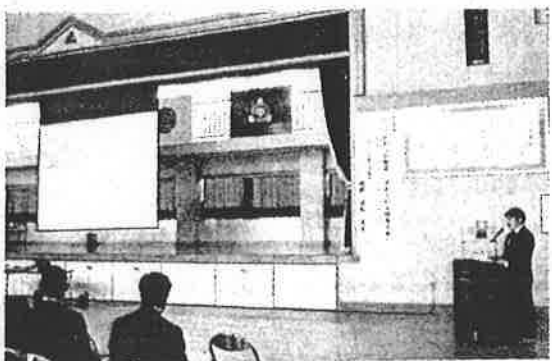
総合学習で「郷土愛」育む

文科省の「授業時数特例校」と県教育委員会の「授業時数の弾力化に係るモデル校事業」に指定され、研究を進めている熊谷市立三尻中学校（田沼良宣校長）で11月30日、研究発表会が行われた。同校を含む県内8校は学校独自に時間割を組んでおり、同校は国語の授業時数を年10時間減らすなどして、総合的な学習の時間を増やして実践した成果を発表した。（桜井和憲）

学力日本一を目指す市の「新熊谷プロジェクト」を踏まえ、総合的な学習の時間を中核としたカリキュラムの工夫・改善を研究の中心にしている。総合的な学習の時間を各学年で年18時間ずつ増やし、国語や社会、数学、理科、

英語の時間を減らした。午前に総合的な学習の時間の授業が公開され、午後は研究発表を実施。カリキュラム・マネジメント部、授業研究部、調査研究部、国語部の担当者が取り組みを紹介し、元

文教大学教授の嶋野道弘氏による記念講演も行われた。研究の成果として、本年度の全国学力・学習状況調査の質問「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いませんか」では、現3年生は2年生の時に熊谷に焦点を当てた探求学習について学習した結果、1学年上よりも前向きな回答を選んだ生徒が大幅に増えたことが紹介された。2年生は「新しい熊谷を創るには？」をテーマとして、小林



研究発表を行う吉田和貴教諭（右奥） 11月30日、熊谷市立三尻中学校

哲也市長に改革を提言した。同校研究主任の吉田和貴

教諭は、教科横断的な視点で言語能力の育成と活用を各教科などの授業に位置付けたことで、生徒の言語能力を重層的に指導できたと強調。「熊谷をテーマに3年間系統的に指導することで郷土愛が育まれ、テーマに系統性を持たせることで探求的な課題を自ら見つけ、解決しようという意識の醸成につながった」と話していた。